

## 令和5年度インクルーシブ・プログラム開発事業 連携協議会

相模原市発達障害支援センター

連携協議会では、発達障害や知的障害の若者にとっての生涯学習の意義について、市内の教育・福祉の関係者、有識者間で共通認識を図ることを目的に、当事者を交えて意見交換を行う。今年度、生涯学習プログラムの研究・開発について協議した内容を報告する。

<委員>

所属等	氏名
(株) はまりハ 顧問	川口 信雄 (会長)
東京学芸大学大学院教育学研究科 教授	藤野 博
信州大学医学部 子どものこころの発達医学教室 教授 附属病院子どものこころ診療部 部長	本田 秀夫
山梨英和大学人間文化学部人間文化学科 准教授/コーディネーター	武部 正明
神奈川県立相模原支援学校 校長	飯窪 美紀子
神奈川県立橋本高等学校 教頭	坂野 敦子
神奈川県立上鶴間高等学校 教頭	前澤 喜仁
社会福祉法人相模原市社会福祉事業団 地域支援課 課長	村山 毅
社会福祉法人風の谷 施設長	西村 三郎
相模女子大学 副学長	奥村 裕司
相模女子大学 総務担当理事 (事務局長)	本橋 明彦
相模女子大学人間社会学部人間心理学科 准教授	狩野 晴子
インクルーシブ・プログラム開発協力者代表	岩本 健吾
インクルーシブ・プログラム開発協力者代表	今藤 孝拓
インクルーシブ・プログラム開発協力者代表 (相模女子大学 卒業生)	山根 美月
インクルーシブ・プログラム開発協力者代表 (相模女子大学 学生)	高橋 芽衣
相模原市市民局スポーツ推進課 課長	白井 由美
相模原市健康福祉局地域包括ケア推進部 高齢・障害者福祉課 課長	沼田 好明
相模原市教育委員会教育局学校教育部 教育センター 所長	奥津 光郎
相模原市教育委員会教育局学校教育部 青少年相談センター 所長	加藤 政義
相模原市教育委員会教育局生涯学習部 生涯学習課 課長	松本 隆人

<事務局構成員>

所属等	氏名
相模原市立療育センター陽光園 所長	山本 克哉
相模原市発達障害支援センター 所長	中山 千春
相模原市立療育センター陽光園 療育相談室 室長	東浦 徳也
相模原市発達障害支援センター 主査	川崎 祐介
相模原市立療育センター陽光園 療育相談室 主任	外崎 薫

相模原市発達障害支援センター 主事	後藤 成海
相模原市発達障害支援センター 主事	曾根田 杏奈
相模女子大学人間社会学部人間心理学科 教授	日戸 由刈
相模女子大学夢をかなえるセンター 部長	有田 雅一
相模女子大学 大学事務部長	齋藤 淳志

## 第1回 会議録

会議名	令和5年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業 インクルーシブ・プログラム開発事業 第1回連携協議会
開催日時	令和5年7月8日(土) 10時00分～11時30分
開催場所	相模女子大学 夢をかなえるセンター4階 ガーデンホール
出席者	委員 16名：川口信雄氏、武部正明氏、飯窪美紀子氏、坂野敦子氏、前澤喜仁氏、村山毅氏、西村三郎氏、奥村裕司氏、本橋明彦氏、岩本健吾氏、今藤孝拓氏、山根美月氏、高橋芽衣氏、白井由美氏、沼田好明氏、松本隆人氏 オブザーバー参加1名：島野泰氏 欠席名：藤野博氏、本田秀夫氏、狩野晴子氏、奥津光郎氏、加藤政義氏
	事務局 9名：山本克哉、中山千春、東浦徳也、川崎祐介、後藤成海、曾根田杏奈、日戸由刈、有田雅一、齋藤淳志
議題等	(1) 令和4年度成果について (2) 令和5年度事業計画について
議 事 の 要 旨	
<p>学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業について、川口委員よりこれまでの経緯について説明がなされた。また、本協議会会長選出について、互選により川口委員が会長に選出され、承認された。</p> <p>次に、オブザーバー参加の神奈川県教育委員会インクルーシブ教育推進課 島野氏よりインクルーシブ教育実践推進校について説明がなされた。</p> <p>議題(1) 令和4年度成果について 事務局(市)より資料に基づいて説明を行った。</p> <p>(2) 令和5年度事業計画について 事務局(市)より資料に基づいて説明を行った。事業について事務局(大学)より、プログラムの進行についてコーディネーターより説明を行った。</p> <p><b>【意見交換】</b> 飯窪委員：特別支援学校(高等部)の進路担当をしたことがあり、卒業後の就労に多くの課題を感じていた。卒業後3年は仕事で困った時のフォローができるが、日常生活の支援では、定期的にみんなで集まる場を作ったりしたが、なかなか集まらず続けていくことは困難であった。県立高校ではインクルーシブ教育実践推進校の取組みが広がってきて、交流及び共同学習</p>	

が大きなテーマになっている。交流学习はかなり進んでいると思うが、交流で終わってしまい、その先に踏み込んだ共同学習まで進まないところが大きな課題だと感じている。この取組みをヒントにして今後活かしていきたい。

村山委員：学校を卒業して社会人になる場合、自立訓練や就労移行などを経てから就労する方もいるが、直接就労される方は本当に不安がある。そんな中、インクルーシブ・プログラムの取組みや先ほどの動画にあるように、大学と一緒に学びいろいろな体験をすることは素晴らしい。こういう活動を通して、自分で新たな発見をすることは自信に繋がると思う。

西村委員：今、福祉現場は障害の有無に関係なく人材が不足していて、高校卒業後すぐに福祉現場に入る方もいる。その先、働いてからの繋がりや学びが少ないことはインクルーシブ教育実践推進校や支援学校を卒業された方だけでないと考え、当事者は決して2人だけではなく、大学生も含めてここにいるメンバーみんなであるといえる。

松本委員：生涯学習の中で、外部識者等から社会的な課題に対する取組みの弱さを指摘されており、具体的な人権に関する学び教育、あとは障害者に対しての学びの機会の少なさを指摘されている。社会教育、生涯学習の中の学びとなると、地域の中でどうやって障害のある方に対して学びを続けていけるのかということを考えなければならない。地域住民の方々それぞれに理解をいただき、その中で学びを組み立てることへの理解を深めていかないとなかなか広まらない。大学という専門の教育機関で行われていることを地域に根差した活動にするためには、我々もいろいろなことを工夫しなければならない。どうやって地域の中で持続可能な事業としてやっていくか模索しているところであり、これからも勉強させて欲しい。

岩本委員：今年はより良いセミナーにしていくにはどうしたらいいのか、当事者目線になって考えていきたい。主観的な考えから客観的な考えを持つ人間になることを目指す。

今藤委員：当事者が自らインクルーシブ事業を発信することで、本人やそのご家族の耳により届くと思うので、当事者が中心となるような活動ができればと思っている。

山根委員：昨年度に引き続きセミナーに関わる。セミナーは昨年度と違う会場で行い、先生も少し変わる。何より趣味発表の形式が全く異なることになるので、どのようなメリットやデメリットがあるのかを慎重に見ながら、参加者が楽しめるようなセミナーを組み立てたい。

高橋委員：昨年度、私は別のグループに参加して、フラットな関係性を作り、自分たちで自己開示して悩み相談も行った。フラットとはいえ余所余所しきがあったり、仲良くなってきても最後の方に、本当はまだ言いたいことあるのではないかと思う場面もあった。今年はもっとフラットな、もっと思いのたけを語れる活動にしていけたらいいと思っている。

本橋委員：市役所の中だけでなく、この地域のすべての垣根を越えて取り組むべき課題であると感じる。このプログラム開発は5年目に入り、年々、体制もメンバーも充実しており、そろそろ実証の段階に入るといって、今後について本協議会を通して考えていきたい。

以上

## 第2回 会議録

会議名	令和5年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業 インクルーシブ・プログラム開発事業 第2回連携協議会	
開催日時	令和5年11月18日(土) 15時00分～16時30分	
開催場所	相模女子大学 夢をかなえるセンター4階 ガーデンホール	
出席者	委員	17名：川口信雄氏、武部正明氏、飯窪美紀子氏、坂野敦子氏、村山毅氏、西村三郎氏、本橋明彦氏、狩野晴子氏、岩本健吾氏、今藤孝拓氏、山根美月氏、高橋芽衣氏、白井由美氏、沼田好明氏、奥津光郎氏、加藤政義氏、松本隆人氏 欠席名：藤野博氏、本田秀夫氏、前澤喜仁氏、奥村裕司氏
	事務局	8名：山本克哉、中山千春、東浦徳也、川崎祐介、後藤成海、曾根田杏奈、日戸由刈、有田雅一
議題等	(1) 事業の経過報告について ア 啓発連続講座 イ インクルーシブ生涯学習プログラム ウ エンパワメント・プログラム エ 日本発達障害学会 オ 成果報告会 (2) 令和6年度事業について	
議 事 の 要 旨		
<p>議題(1) 事業の経過報告について</p> <p>ア 啓発連続講座 事務局(市)より資料に基づいて説明を行った。</p> <p>イ インクルーシブ生涯学習プログラム</p> <p>ウ エンパワメント・プログラム</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・インクルーシブゼミおよび大学で学ぶ楽しみ発見セミナーについて、高橋委員より中間報告を行った。</li> <li>・インクルーシブリサーチについて、今藤委員より報告を行った。</li> <li>・インクルーシブメディアについて、岩本委員より報告を行った。</li> <li>・大学で学ぶ楽しみ発見セミナーの振り返りについて、山根委員より報告を行った。</li> </ul> <p>エ 日本発達障害学会 事務局(大学)より資料に基づいて説明を行った。</p> <p>オ 成果報告会 事務局(大学)より資料に基づいて説明を行った。</p> <p><b>【意見交換】</b></p> <p>加藤委員：昨年から引き続き、今回も非常に興味深く拝聴した。昨年に比べ内容をさらに深く、より良いものを作っていこうという思いが感じられて、素晴らしい取り組みだと思った。</p> <p>この取組みの今後の展望についてお聞きしたい。例えば、相模女子大学だけではなく、近隣の大学等と連携するような広がりはあるのか。また、昨年度に引き続き、開発協力者の2人から報告してもらったが、今後、新たに開発協力者を募る予定はあるのか。先輩という立場で取り組むことも、新たな学びになると思う。</p>		

日戸氏（事務局）：このプログラムの目指すところは、いろいろな大学で、その大学でできることを展開してもらうこと。そのための発火材としてこの活動に取り組んでいる。開発協力者代表については、今後、2人以外のメンバーにも舞台に立ってもらう機会が増えていくのではないと思う。先輩として次の人たちに対して、今とは違う、さまざまなことを教えていくという立場で関わってもらうことも楽しみにしている。

中山所長（事務局）：相模原市と相模女子大学が連携してこの事業に取り組んでいるが、市と大学がそれぞれの強みを活かしながら一緒に活動している。プログラム開発の部分についてはノウハウがある大学中心に担ってもらい、市は、この活動を広く市民の方に知ってもらうことを目標に取り組んでいる。今後については、大学と役割分担し連携を図りながら、委員の皆さま、勤労青年の方、学生の方等のご意見を聞き、検討していく必要があると感じている。

狩野委員：着実に1年目、2年目と積み重ねて、3年目また新たな取組みが始まったという発表を聞きながら、発表している姿を非常に頼もしく感じた。先日、『私の趣味自慢タイム』を見学したが、勤労青年と学生が自分の役割を果たしている姿を見て、ちゃんと輝く場が与えられれば、そこで発揮できる力を持っているということを強く感じた。私たちがやらなければいけないことは、そういった場を用意することや、役割を作っていく、付与していくことであると感じる。

白井委員：報道機関へ積極的に提供することはされているのか。

有田氏（事務局）：報道に繋がるかは不明であるが、前回のセミナーにはNHKの方が視察に来られた。少しずつ関心をいただいていると感じている。

沼田委員：セミナーでの『私の趣味自慢タイム』のグループワークの目的は、コミュニケーション能力を育むことであると思う。やはり社会人になると職場や研修の場で、グループ内で議論したり発表したりする中でコミュニケーション力を培うことがある。障害のある方もそういった経験が自信に繋がり、社会に出た後も生かされるであろう。とても有意義な取組みであると感じた。取組みの裾野を広げ、より多くの方が経験できるようになれば良いと感じる。

奥津委員：『障害のある人が学びたくなる大学』という報告の中で、「安心して相談できる」「主体的に参加できる」「自分の伝えたいことを主張できる」という話があったが、これは、どの大学、集団、会社、組織においても当てはまるのではないか。そういったところが、インクルーシブの根幹なのではないかと感じた。メディアの報告では、ホームページやYouTubeに楽しい活動として動画がアップロードされていると、その活気が視聴者に伝わり、興味や関心に繋がっていくのではないかと感じた。現在教員は人員不足と言われているが、教員の仕事はカラフルであると感じている。そのカラフルさを、世間にどのように伝えたら良いかを考えた時の方法を示唆してもらったように感じる。

(2) 令和6年度事業について  
事務局（市）より資料に基づいて説明を行った。

以上

## 2023 年度インクルーシブ・プログラム開発事業総括

### 「大学生のキャリア発達を促すインクルーシブ・プログラム」

連携協議会会長 川口信雄

2023 年 5 月に新型コロナウイルスが 5 類になり、コロナ前の生活が戻りつつあるが、この 3 年間教育界は翻弄され続けた。現 4 年生はコロナパンデミックと共に大学生活がスタートし、入学式も対面授業も図書館もサークル活動もない。本来、青春を謳歌する輝く季節のはずが・・・こんなはずじゃなかった。彼らとの出会いは 3 年時のインクルーシブ・ゼミだった。最初の印象は声が小さいこと。声を張ることが憚られる社会情勢が影響していたのかもしれない。また、学生間の横のつながりが細く感じられ、日戸教授と学生それぞれが糸電話でつながっているような印象を受けた。

インクルーシブ・ゼミに参加する中で、彼らの学びに向かう姿勢が明らかに変化した。取組みが意欲的になり、学生の方からプログラムの提案をするようになったのだ。そして、4 年時には「さがっば当事者研究会」を立ち上げた。「さがっば当事者研究会」とは知的障害や発達障害のある勤労青年と相模女子大学生による、当事者研究会である。大学生の T さんにそのターニングポイントを聞いた。

K さん、S さんと日戸ゼミの授業内でインクルーシブ・ゼミについて発表するための準備をしていました。準備は順調に進んでいましたが、その内容のほとんどが自分たち目線での感想でしかないことに気が付きました。「インクルーシブ」な活動なのだから、参加している全員の意見を取り入れたい、もっとみんなの話を聞いてみたいと思い、インタビューをお願いしました。インタビューでほとんどの方が好意的な感想をくれた中で、O さんが「よそよそしいな～って感じた。もっとフレンドリーに話しやすい環境が良い」と発言してくれたことが非常に大きかったです。思っていることがあるのに、それを話しにくい、聞にくい環境になってしまっていたんだと反省しました。その後決定した「あだ名で呼び合う」効果は絶大で、互いの距離感がグッと縮まりました。不思議と、一人一人に対する興味が増したように感じています。最後の方の活動期間の雰囲気がとても良かったため、今回の反省を活かして来年度も活動したいと思いました。

自らの取組みをふり返り、当事者目線に立っていないことに気付いた大学生は、チームで話し合い、日戸教授に勤労青年へのインタビューを提案し、実行した。そして、青年の率直な意見から多くを学ぶことができた。ここには「意志ある学び」がある。本プログラムは大学生のキャリア発達を促すことにも寄与したと言えよう。ともするとインクルーシブ教育

には「当事者が大学での学びでこれだけ成長できました」のように、障害者の権利擁護の文脈が強く出がちではないだろうか。その視点ももちろん大切であるが、インクルーシブ教育は大学生にとっても大きなプラスになる。

2023年度5年目を迎えたインクルーシブ・プログラムはゼミ、セミナー、リサーチ、メディアと多様なプログラムを展開してきたが、今年度の特筆すべきプログラムは、先述した「さがっば当事者研究会」であろう。ポイントは大学生が発案し、立ち上げたことにある。当事者主体の取組みも充実してきた。一例としてセミナーにおける「私の趣味自慢タイム」の運営があげられる。小グループにわかれたところからは、勤労青年と大学生が進行し、見事に盛り上げてくれた。また、彼らは連携協議会の中でも委員として、率直で実践に基づいた価値ある発言をしてくれている。

今年は相模原市との協働体制が深まる年でもあった。その代表が相模原市発達障害支援センター主催による「インクルーシブ・プログラム開発事業啓発連続講座」である。この講座は発達障害や知的障害のある若者に本プログラムを知らしめることを目的にしたもので、昨年度までの取組みで課題となっていたものだ。

相模女子大学の全学的な支援体制も、生涯学修支援課を中心にさらに充実してきている。昨年度の成果報告会では学長から参加者一人一人に「修了証」が授与された。2023年度は「入講式」を開催し、ご家族も多数出席いただくことができた。5年前に日戸教授と本プログラムを立ち上げた時を思うと隔世の感がある。

さて、わが国の特別支援学校高等部卒業生(知的障害)の大学等への進学率はわずか0.4%と極端に少なく、就職か福祉かの二択を迫られている。大学には知的障害や発達障害の若者が学ぶ場はほとんど用意されていないのだ。一方、欧米や韓国の大学では知的障害者であっても本人の意志を認め、一人の大学生として受け入れているケースが数多く報告されている。その背景には2006年に採択された国連障害者権利条約の存在がある。同条約、第24条、第5項には「締結国は、障害者が差別なしに、かつ、他の者との平等を基礎として、一般的な高等教育、職業訓練、成人教育及び生涯学習を享受することができる」とあり、2014年に日本も同条約を批准している。大学におけるインクルーシブな学びはわが国にとって喫緊の課題と言えよう。相模女子大学を舞台にした取組みは試行錯誤の途上にあり、決して万能なプログラムとは考えていない。私たちの実践が呼び水となり、全国各地の大学でその大学にあったインクルーシブ・プログラムが展開され、「もっと学びたい」「キャンパスライフを楽しみたい」という若者に学びの場が広がっていくことを期待している。

2023年7月吉日

報道機関 各位

## 相模女子大学は、相模原市と協働して 9月より「インクルーシブ生涯学習プログラム」を開講します

相模女子大学（神奈川県相模原市南区、学長・田畑雅英）は、令和3年度より、相模原市からの委託を受けて、発達障害や知的障害（以下、発達障害）の若者を対象にインクルーシブな生涯学習および学生や市民との交流のためのプログラム開発（インクルーシブ・プログラム開発事業）を相模原市発達障害支援センターと協働で行っています。※「インクルーシブ」とは「全てを含む」という言葉で、さまざまな特性を持つ人たちが共に過ごすことを意味しています。

2023（令和5）年度は、前年度の経験を踏まえて、1)他大学でも汎用可能な「インクルーシブ生涯学習プログラム」のモデル開発、および2)プログラム運営に当事者の参加を図り、市内の発達障害の高校生や若者に向けてプログラムの魅力を発信する技術や、活動を通じて参加者をサポートする心がまえを身につける「エンパワメント・プログラム」の実践、という2本柱で開発を進めます（図）。

この内、インクルーシブ生涯学習プログラムは、9月23日の「入講式」を第1回として秋学期の土曜日に全8回を計画しています。基盤は、発達障害の若者4~5名と相模女子大学の学生4~5名の固定メンバーによる「クローズドな講座」（通称、ゼミ）です。ゼミ活動には、学校教育を卒業し就労したものの、日常生活が家庭と職場の往復だけとなり興味関心が狭まりがちな発達障害や知的障害の青年（以下、勤労青年）、及び相模女子大学の学生を対象とする。固定メンバーによる交流の積み重ねにより、自己理解の深化や相談への動機づけを高め、フラットな関係によるチームワークでの活動を通じて精神的成長に働きかけます。

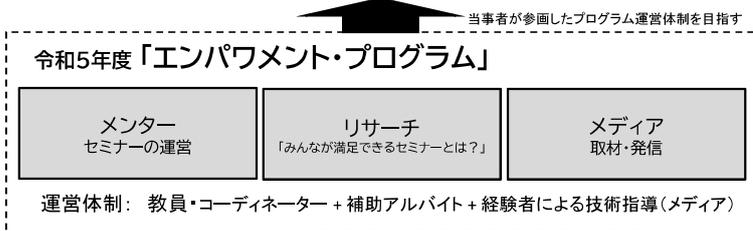
また、この生涯学習プログラムには、多様な市民が参画できる「オープンセミナー」（以下、セミナー）が3回組み込まれています（表）。この3回のセミナーは、相模女子大学が市民向け生涯学修講座として開講する「さがみアカデミー」の枠組みを活用して広く募集を行い、ゼミの固定

**令和5年度「インクルーシブ生涯学習プログラム」**（秋学期・土曜日開講）

	第1回 (9/23)	第2回 (9/30)	第3回 (10/14)	第4回 (11/11)	第5回 (11/18)	第6回 (12/9)	第7回 (1/27)	第8回 (2/3)
8:30~	入講式	ゼミ活動	ゼミ活動	ゼミ活動	ゼミ活動	ゼミ活動	ゼミ活動	修了式
10:30~		オープンセミナー		オープンセミナー		オープンセミナー		

注)ゼミ活動：15名程度の固定メンバーを対象。令和5年度は、リサーチ活動を行う。  
オープン・セミナー：定員30名の連続セミナー。令和5年度は15名程度の固定メンバー+15名程度の申し込み者で構成する。

**運営体制：コーディネーター+生涯学修支援部門のスタッフ+講座の担当教員**  
(プログラム運営ミーティングを開催)



**図 令和5年度インクルーシブプログラム開発事業の概要**



## Press Release

メンバーと共に聴講することで、障害の有無に関係なく同世代の若者が交流し、学びを楽しむための場として開講します。

これら生涯学習プログラムの下支えを担う「エンパワメント・プログラム」は、メンター活動、リサーチ活動、メディア活動の3本柱で構成されます。メンター活動では勤労青年、学生、市民ボランティアがチームを組んで、セミナーの企画や運営に携わります。リサーチ活動では「誰もが楽しめるセミナーとは」というテーマでセミナーの効果検証を行い、学会や事業成果報告会で発表を行います。また、メディア活動では、令和4年度に引き続きセミナーを中心に取材し、動画を作成することで、生涯学習プログラムの魅力を社会に向けて発信していくことに取り組みます。なお、メディア活動にあたっては、当事者が単独で取材や動画作成を行うことが難しいため、令和5年度も引き続き経験者による技術指導を受ける場を設ける予定です。

(表) オープンセミナー (さがみアカデミー: みんな集まれ! 大学で学ぶ楽しみ発見セミナー)

日時	各回の講座内容	講師	申込締切
9月30日(土) 10:30~12:40	<b>「わかる」って、どういうこと? 自分の視点で、答えを生み出す思考法</b> 私たちは、つい正解を求めてしまう…でもその“正解”って、本当に正しいの? 自分だけの感覚や、興味のツボを大事にしたものの見方から、答えを生み出す考え方を体験しよう!	<b>伊東 俊彦</b> (相模女子大学 人間社会学部 教授)	9/14(木)
11月11日(土) 10:30~12:40	<b>「欲」との上手な付き合い方 ところが満たされる瞑想法</b> 「もっと〇〇したい」「◇◇はイヤ」…人が抱くさまざまな“欲”は、生きるエネルギーになるけれど、時には苦しみの原因にも。自分の“欲”を見つめ、コントロールする方法を、一緒に考えてみませんか☆	<b>石川 勇一</b> (相模女子大学 人間社会学部 教授)	10/26(木)
12月9日(土) 10:30~12:40	<b>この気持ち、どう扱う? 自分も相手も大事にできる感情の心理学</b> 「楽しい」「怖い」「不安」「怒り」…どんな感情も人間の重要な一部。ネガティブに思えるものも、生きるのに必要なシグナルです。自分の気持ちにじっくり向き合い、自分も人も大事にできるコツを学ぼう!	<b>森平 直子</b> (相模女子大学 人間社会学部 教授)	11/23(木)

\* オープンセミナー (さがみアカデミー) の申し込みは、8月中旬開始予定です。

こちらのアドレスからお申込みください。⇒ <https://www.sagaaca.net/>

【本件に関する取材依頼・お問い合わせ先】 夢をかなえるセンター 生涯学修支援課 (担当: 有田)

[TEL] 042-747-9017 [FAX] 042-747-9599

[E-mail] [sagami-info@mail2.sagami-wu.ac.jp](mailto:sagami-info@mail2.sagami-wu.ac.jp) [HP] <https://www.sagami-wu.ac.jp/>

## 学会・出版物への掲載（2023年度）

### 学会発表

2023年度は、勤労青年や学生による発表の多い年度となった。

学会名	発表・シンポジウムのテーマ	発表者	開催時期
日本自閉症スペクトラム学会第21回研究大会（東京）	学会企画シンポジウム1「支援者と当事者の対話」	日戸 由刈、岩本健吾、今藤孝拓	2023年8月
超福祉の学校@SHIBUYA2023（東京）	文部科学省主催シンポジウム「大学生発！みんなのマナビ、私のマナビ」（発表タイトル「インクルーシブ・ゼミ」）	高橋芽衣	2023年10月
日本発達障害学会第58回大会（京都）	自主シンポジウムJ1「知的・発達障害の当事者たちが企画・運営・発信するインクルーシブな生涯学習プログラムの開発」	日戸由刈、古賀千聖、篠原優菜、武部正明、岩本健吾、今藤孝拓、曾根田杏奈、川口信雄、阿部圭但	2023年11月
第64回日本児童青年精神医学会総会（弘前）	シンポジウム5「神経発達症の人たちの余暇活動支援」（発表タイトル「療育センターでの仲間づくり支援プログラムの開発から大学での生涯学習プログラムの開発に至るまで」）	日戸由刈	2023年11月
神奈川県共生社会実践セミナー（神奈川）	学生による活動発表（発表タイトル「相模女子大学さがっば当事者研究会発表」）	高橋芽衣、古賀千聖、今藤孝拓、水野克隆	2023年12月

### 出版物への掲載

2023年度はなし（※2024年1月時点 印刷中2本）

### その他

川口氏・日戸氏による講演において、本プログラムの紹介を広く行っている。

おわりに

おわりに

相模女子大学 副学長 奥村裕司

相模原市と相模女子大学との連携・協働事業である、「インクルーシブ・プログラム開発事業」も3年目を迎えた。「共にささえ合い生きる社会」の実現を目標としている相模原市と「多様な学びの機会を提供し、開かれた大学」を目指す相模女子大学にとっては、これまでの2年間の成果をさらに発展させるとともに、今後の本事業の在るべき姿を考えるととても良い機会であったことは言うまでも無い。

初年度の本事業における取り組みでは、「多様性と包摂 (Diversity & Inclusion)」を基底とした大学における「生涯学習」の核となる考え方を提唱した。また、2年目の取り組みでは、初年度の取り組みで見えてきた課題を解決するため、地域より求められるニーズを再探査し、「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」を掲げ、「インクルーシブ生涯学習プログラム」のモデル開発や、それを下支えする「エンパワーメント・プログラム」の実践研究を行った。さらに3年目となる本年度は、昨年度の2本のプログラムを単に継続するだけでなく、それぞれの弱点を強化することで、広く地域社会へ普及・還元することに注力した。今年度、県外からの視察や問い合わせ等が増えたことは、本事業の重要性が少しずつでも確実に周囲の人々に認知され、普及してきていることを示しており、改めて本事業の社会的意義の大きさを感じた。「インクルーシブ生涯学習プログラム」や「エンパワーメント・プログラム」の実践研究は、「障害者の多様な学習」に位置づけられている。障害者の「学びたい」という意識が全面に活かされ、かつそれが自由度の高いプログラム運営へとつながること、加えて、多くの人々に認知され、地域から社会全体へと広まることを切に願っている。

「インクルーシブ・プログラム開発事業」が持続可能な取り組みへと展開していくためには、当然ながら人員や資金面の確保が必要である。しかしながら、それ以上に大事なことは、この取り組みに携わるすべての方々が目的を見失うことがないよう、お互いをささえ合い、さらには地域の教育・福祉機関等とも有機的に連携し、プログラムを推し進めていくことだと考えている。昨年同様、本事業運営にあたって組織した連携協議会では、プログラム開発に資する有用な意見が多数見出された。この点を真摯に受け止め、今後活用していきたい。障害者の「学びたい」を第一に考えた自由度の高いプログラム運営において、専門知識をもった教員を有する大学が果たすべき責任は重いだが、地域の教育・福祉関連機関といった資源を活かしながら本事業を展開していくことができれば、自ずと持続可能な運営体制がみえてくると信じている。これからも一層の努力を惜しまない所存である。

おわりに

相模原市こども・若者未来局長 杉野孝幸

日頃より、本市の発達障害者支援にご理解とご協力を賜り、感謝申し上げます。

また、相模女子大学の皆さま、プログラム開発協力者の皆さま、そして貴重なご意見をいただきました関係者の皆さまのお力添えを賜り、本年度におきましても「インクルーシブ・プログラム開発事業」に取り組むことができました。厚く御礼申し上げます。

さて、令和4年に文部科学省が実施した調査では、通常の学級に在籍し、発達障害の可能性があり特別な支援が必要な児童生徒の割合は、小学校・中学校においては10年前の前回調査から2.3ポイント増加し8.8%となり、11人に1人程度在籍していると推計されるという結果でした。これは、発達障害について広く認知され、理解が広まってきている状況であり、今後より一層、各ライフステージにおいて、個性に応じた切れ目のない支援が求められているものと捉えております。

障害の有無に関わらず、あらゆる人の尊厳が守られ、安全で安心して暮らせる共生社会を実現するため、引き続き、障害等に関する理解を促進するとともに、障害のある方が自らの望む生活を送ることができるよう、諸施策に取り組んでまいります。

このような状況のなか、令和3年度から取り組んでまいりました「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」におきましては文部科学省より評価をいただき、本年度は「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」として受託し、相模女子大学と連携・協働して「インクルーシブ・プログラム開発事業」に取り組みました。本事業は、障害があっても同世代の若者と同じように仲間と過ごすことや、自分の好きなことについて学びを深めることができる社会の実現を目指し、共に学ぶことのできる機会を創出していくとともに、障害等に関する理解を促進していく重要な取り組みです。

本市といたしましても、教育や福祉分野など、障害のある方の生涯学習機会の拡充に取り組む多様な主体の皆さまと連携・協働しながら、共に学び、生きる社会の実現に向けた取り組みを進めてまいります。本市の発達障害支援の更なる充実に向けまして、皆さまのご理解とご協力をお願い申し上げまして、報告にあたりましてのむすびとさせていただきます。

令和5年度（2023年度）文部科学省委託事業  
学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業  
「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」

**行政と大学の連携・協働を通じたインクルーシブ・プログラムの開発  
—当事者が主体となって地域に働きかけ、交流や仲間づくりを推進するために—**

2024年2月発行

相模原市発達障害支援センター

〒252-0226 神奈川県相模原市中央区陽光台3丁目19番2号 TEL 042-756-8411

相模女子大学

〒252-0383 神奈川県相模原市南区文京2丁目1番1号 TEL 042-742-1411（代）

